
記憶のライダー

秋良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶のライダー

【Nコード】

N9235Y

【作者名】

秋良

【あらすじ】

普通に暮らしていた、ライダー・ラノベ・アニメなんかが好きなごく普通の青年が、Wのいる風都へとばされライダーの記憶を宿す「メモリー」の力を使い、Wに協力していくというストーリー。

第一話：Mの邂逅／ここは風都！？（前書き）

初投稿となります。

少々主人公チート気味ですが、まあそれも設定で調整する方向で。

第一話：Mの邂逅／ここは風都！？

「ふいふ、買えて良かったよ、ロストドライバー！」

「さて、食玩のガイアメモリでも一緒に買つときですか！」

ライダー、ラノベやアニメなんかが大好きな僕は

今日再販されたロストドライバーをデパートに買いにきて、首尾よく購入に成功。

そして食玩のガイアメモリを手にとったとき、とんでもないことが起きた。

いきなり地面が揺れだしたのだ。

「な、なんだ！地震！？うわっ、足元が！！！」

そして、足元の床に穴が開いて僕は落ちていった。

記憶のライダー・第一話：Mの邂逅／ここは風都！？

「う、ううん……」

デパートの床に開いた穴から落下したあと、気がついたら僕はとんでもないところにいた。

「……ここ、どこ？つてあのタワーは！？」

そこにあつたのは巨大な風車のついたタワー。つまりここは。

「……風都、なの？」

そしてその時、遠くから悲鳴が聞こえてきた！

「ッ！なんだ！？……まさか！」

僕はそちらのほうへと走っていった。

とあるスタジアムの横の広場。そこでは、T・REXドーパントが破壊活動が続いていた。

「ハハハハ！俺という選手を採用しなかつた球団など必要ない！」

崩れてしまえ！」

破壊を続けるドーパント。しかしそこへ駆けつける一人の男が。

「おっとそこまでだ、ドーパント」

そしてドーパントとスタジアムの間立ちはだかる。

「復讐なんて、やっても空しいだけだろうが！」

「うるさい！邪魔をするならお前も噛み砕いてやる！」

そう叫び、牙をむく

「ちっ、やっぱり話は聞かねえか：仕方ねえ、フィリップ！」

『ああ、翔太郎。行くよ』

「CYCLONE！」

「頼むぜ、相棒」

「JOKER！」

「「変身！！」」

「CYCLONE！」「JOKER！」

地球の声、ガイアウィスパーと共に彼らは変身した。風都を守る「仮面ライダー」に

「貴様らは！？」

「俺たちは」

「二人で一人の仮面ライダー」

『さあ、お前の罪を、数えろ！』

そのスタジアムの近くの物陰でその戦いを見ていた僕は、その光景を目撃していた。

「あれが、本物のダブル…」

すると、僕の持っているバッグの中から、

「MEMORY！」というガイアウィスパーが鳴り響く！

「え…！？メモリーメモリ？こんなのは持ってなかったはずだけど・

・まさか。」

そして僕は、バッグの中から剥き身で入っていたロストドライバーを取り出した。

「ちゃんと箱に入っていたはずなのに。それに材質も金属になつてる…試してみるか…変身！」

「MEMORY！」

そして僕の周りを地球の記憶が取り巻き、僕も変身を遂げていた。まるで地球の記憶の結晶のような緑のクリスタルカラーの装甲の、仮面ライダージョーカーのような姿のライダーへ。

「これが…仮面ライダーの力。よし！」

僕は、その姿でドーパントとダブルの方へと駆けていった。

「どうしたどうした！？風都を守る仮面ライダーとやらの実力は、その程度のものか！！」

そのころWは、T・REXドーパントのパワーに圧倒されていた。

「クッ、こいつ、明らかに今までのドーパントより強えぞ、フィリップ！」

「これは…メモリとの適合率が高いのか？興味深い。」

「フィリップ〜！今はんなことはいいだろぅが！とつとと対抗策を考えてくれ！」

そんなコントを繰り返しながらT・REXの攻撃をかわし続けるW。

しかし、WにT・REXの尾が振り下ろされる！

「やべえ、かわし切れねえ！」

「させません！」

その声とともに、横合いから緑に輝く腕が伸びびドーパントの尾を弾き飛ばした。

「お、お前は？」

「お、お前は？」

翔太郎さんがこつちを見て呆然としている。まあ、当たり前だけど。
「大丈夫ですか、W！」

「僕たちのことを知っている…一体、何者なんだい？君は」

「僕は通りすがりの仮面ライダー…じゃなかった、仮面ライダーメモリー！」

「あなたたちに協力します！」

僕はドーパントを殴り飛ばしつつ、ダブルに呼びかけた。

「メモリー…『記憶』の記憶？おもしろい」

「だからどうでもいいだろフィリップ！メモリー、協力助かる！行くぜ！」

「はい、行きますよ！」

そう答えつつ、僕はひとつの疑問を感じていた。

（なんで、僕にはこのメモリの力が判るんだ…？）

そうこうしているうちに、Wの本領が発揮される。

「メモリチェンジだ、フィリップ！」

「このドーパントの硬さには、このメモリだ」

「HEAT！」「METAL！」

ガイアウイスパーと共にWのカラーリングが変更され、メモリチェンジが完了した。

「仮面ライダーダブル・ヒートメタルか。だったらこつちも！」

そう言い、僕はマキシマムスロットの横にある

『ウエポンスロット』にメモリーメモリを一度セット。

「メモリー！」

すると、グリーンクリスタルカラーのエンジンブレード、

『メモリーブレード』が降って来て僕の横に刺さった。

「一気に決めましょう、ダブル！」

「ああ、行くぜフィリップ！」

「オーケー、翔太郎。メモリーブレイクだ！」

W、メモリー双方の武器にガイアメモリを装填。

「METAL! MAXIMUM DRIVE!」

「MEMORY! MAXIMUM DRIVE!」

『メタルブランディング!』

「メモリーデリーター!」

ダブルが炎を纏ったメタルシャフトでドーパントを吹き飛ばし、それをメモリーが緑色の閃光を放つメモリーブレードで叩き斬る。

「ぐああああああ...」

T・REXドーパントの絶叫と共にドーパントは倒され、

爆煙が晴れた後には一人の男と、壊れた「T」のガイアメモリが落ちていた。

T・REXドーパントを倒した後、僕はWに声をかける。

「やりましたね、翔太郎さん、フィリップさん」

「おい、お前なんで俺たちの事知ってるんだ?」

「それに、そのメモリとロストドライバーはどうしたんだい?」

「ああ、そうですね。まずは、変身を解除します。」

そして、変身をといた僕は二人に自己紹介をした。

「僕の名前は、ほしお星雄 みくり聡里です。はじめまして、仮面ライダーダブル。

そして、これからよろしくお願いします」

こうして、地球の記憶を巡る「本来とは違う」Wの物語が始まった。

To Be Continued...

第一話：Mの邂逅／ここは風都！？（後書き）

さ「はじめまして！聡里です」

作「初投稿になります、作者です。これから、よろしくおねがいます」

さ「作者さん、僕を呼んだのは何ですか？」

作「いや、面白そうだから」

さ「フイ」

作「まったまった、メモリーブレードを構えるな！怖いから！

それはそれとして、聡里の設定をここで紹介します」

星雄 聡里：ほしお さとり 18歳

バイクの免許を取り立ての大学一年生（ちなみに大型二輪）。

だからライダーと名乗って問題なし（そんな理由かい！by聡里）。性格は子供っぽく、ボケとツツコミ双方こなす。

しかしツツコミの方向性がときどきおかしい。

第一級フラグ建築士（無自覚）。

ロストドライバーを買いにデパートに行き、購入できたところで謎の現象に巻き込まれ、風都へと移動してしまった。

変身するライダーは仮面ライダーメモリ！

戦う理由はまだ見つかっていないが、左たちの事務所に転がり込む羽目になる。

仮面ライダーメモリ

『記憶』の記憶を持った特殊なガイアメモリを使い変身するライダー。

ドライバーはロストドライバーによく似ているが、ベルトにはマキシマムスロットの他に「ウェポンスロット」と「チェンジスロット」

、「アビリティスロット」の三つと、「メモリエクター」というメモリ射出口がある。

(それぞれの機能は発揮される回に解説)

使用武器：メモリーブレード、???

メモリーブレードはエンジンブレードの記憶を元に構築されていて、ほぼ同等の機能を持つ。しかし、使用するメモリはメモリーのメモリをそのまま使用するため、ギジメモリでは出せない高出力の攻撃が可能。

作「…とまあ、今回はこんな具合だな。」

さ「なんていうか、まだまだ謎だらけですね」

作「まあ、第一話でいきなりはおかしいだろ？」

さ「ええ、ですが…第一級フラグ建築士(無自覚)?」

作「こなへんはおいおい出します。適当に」

さ「何考えてるんですか？」

作「べつつにい〜?」

さ「怪しい…」ジャキンツ!

作「まったまった、だからエンジンブレード構えるなツ!

そ、それでは皆さん、またいつかー!」

さ「逃げんな〜!」

第二話：Mの邂逅／聖夜の攻防（前書き）

作者「今回はクリスマスも近いので、クリスマスにちなんだエピソードです」

聡里「って、盛大なネタバレになってませんか!？」

作者「大丈夫だ、問題ない」

聡里「はあ……もうなんでもいいや。それでは、今回登場する武器の解説をします。といっても、簡単なものですけどね」

メモリーシャフト

メタルシャフトの赤の部分がグリーンクリスタルになったもの。

特に本体に差異はない。

特殊機能としては、オリジナルメモリガジェットを接続して使用できる。

聡里「こんな感じですよ。オリジナルガジェットに関しては、ネタバレになるので

あとがきに書きます」

作者「それじゃ、本編どうぞ」

第二話：Mの邂逅／聖夜の攻防

「成程：大体事情はわかった。買い物をしていたら、いつのまにかこの風都にいた、と」

翔太郎さんが僕にそう聞いてくる。

場所は鳴海探偵事務所。翔太郎さんとフィリップさんが二人で切り盛りしている探偵事務所だ。

「はい。突拍子もないとは思いますが、そうなんです。」

「それにしても、なぜ君は僕たちのことを知っているんだい？それも、ガイアメモリの力についてまで」

「えつとですね、お二人の変身する『仮面ライダーW』、そしてそのシリーズである『仮面ライダーシリーズ』は僕らの世界では特撮ドラマなんです」

僕のその発言に、翔太郎さんとフィリップさんは驚愕する。

「俺たちの戦いが、テレビドラマあ！？」

「なるほど、パラルワールドがあるならばそんな世界があってもおかしくない……面白い。」

ムラムラするねえ」

フィリップさんも翔太郎さんも、本当にテレビ通りなんだ……見てるこっちが面白いよ。

「だったら、君はこれからどんなドーパントが出てくるのかという記憶も持っているのでは？」

だとすれば、捜査もなにも必要なくなるんだけどね」

「それはできないんです。今の僕は、その記憶を思い出すことができないみたいなので。」

ですけど、その局面にあつたら思い出せるみたいですよ」

まったく都合のいい記憶喪失みたいだなあ。

「そういえば、君の持っているメモリは『メモリー』のメモリだと

言っていたね。

一体、どんな能力があるのか教えてくれないかな？」

「もちろんですよ、フィリップさん。僕のメモリ、メモリーメモリは限定的に地球の本棚の一部へアクセスし、情報を引き出す能力があります」

その説明で、彼はまた驚いたようだった。

「地球の本棚へ？……興味深い。ぜひ君のメモリを調べさせてくれ！大丈夫、絶対に壊さないから！」

その迫力に気おされながら僕が了承すると、

フィリップさんはスキップでもしかねない機嫌のよさで秘密の地下室へ入っていった。

「あ、おいフィリップ！？……まったく、しゃーねーな。

とにかく、お前行くあて無いんだろ？だったら、ここで働いてみる気は無いか？」

とんでもなく良い提案だった。魅力的なんだけど、大丈夫かな？

「え、いいんですか！？でも、ご迷惑なんじゃ……？」

「いいや、迷惑なんかじゃないぜ。むしろ、仮面ライダーメモリーだっけか？」

の力を貸してくれると俺たちも仕事がやりやすいからな」

「…成程、ギヴ&テイクってことですか。でしたら、こちらも協力は惜しみません。」

存分に僕の力、使ってください」

そして、僕は鳴海探偵事務所の助手として、Wの世界で暮らすことになった。

…のはいいんだけど。

「こりゃああ！」

スツパン！！

「痛てっ！」

「あいたツ！」

僕と翔太郎さんの後頭部になにかが痛い音をたてて打ち付けられ、

僕らは頭を抑える。

「亜樹子オ！いいかげん人の頭をスリツパでブツ叩くのやめろ！」

「亜樹子さん……初対面の人にも容赦ないんですね」

そう、そこにいたのは鳴海探偵事務所（自称）所長の鳴海亜樹子さんだった。

「だまらっしゃい翔太郎くん！それとその人誰？なんで私の名前知ってるの？」

「初めまして。僕は星雄聡里。今日付けで翔太郎さんの助手になりました。」

これからよろしくお願いします、鳴海亜樹子所長。」

「……翔太郎くん、どつからこんな有能な助手拾ってきたの？」

さらりと人を物みたいに言わないでください、亜樹子さん。

「そんなことよりいいかげん突っ込みを手加減しやがれ！」

「何よ、やるかこの〜！」

「喧嘩はやめて下さいってば〜！」

そんなこんなでどたばたしていると、事務所の入り口のドアが開いた。

「あの……」

その声を掛けかけて、中で起きているドタバタを観て呆然とする女性。

「亜樹子おおおお！」

「いいかげんに……って、お客さん！」

こんな状況でも気づくとは亜樹子さん流石です。

「す、すみません、探偵事務所と間違えました！」

「ま、待つて待つて！」

そして、全員そろって唱和する。

「「「探偵事務所です!!」「」」

「連続風車破壊事件?」

「はい、そうなんです」

依頼人の女性の名前は、かざまつりあおい風祭葵さん。

彼女は風都に無数にある風車を作ったり修理したりしている、

「風祭風工業」の社長の娘さんである。

「最近、町で過剰発電で壊れる風車の数が激増しているんです」

「過剰発電? どういうこと?」

亜樹子さんは良く判っていないらしい。

「はい、説明しますね。元々あの風車は普通の風力発電装置を小型化したもので、

風都に吹き続ける風を利用して発電するものです。

ですが、あまりに強い風、それこそ超大型台風風の風などが吹くと、過剰電圧で配線が焼ききれたり風車そのものが壊れたりするんです。

最近それが一週間に数台のペースで壊れるといった具合で、明らかにおかしいんです」

「ほう、そいつは放っておけねえな」

あ、翔太郎さんスイッチ入った。

「困っている女性を放っておくのはハードボイルドとは言えないからな。」

それに、風都の象徴の風車を壊して回っている奴がいるとしたら、そいつはこの風都を泣かせている。そんな奴は、この俺が放っておけねえ。

この依頼、受けさせてもらおう」

「ありがとうございます、左さん!」

「良いつて事さ。俺たちの専門分野という気もするしな。それじゃ、

何かわかったら連絡入れるぜ」

「はい、よろしくお願いします。では、また」

そう一言言い、風祭さんは帰っていった。

「連続風車破壊事件、かあ……何でそんなことするんでしょう、翔太郎さん」

「わからねえ。だが、

瞬間的に、かつ局所的にそんな台風も超えるような風を吹かせることは普通はまず不可能だな」

「ということは……ドーパント、ですか」

「そういうことになるな。うっし、まずは風車が破損したところに行ってみるか。資料は持ったな？」

「はい、翔太郎さん！あ、それとフィリップさんに一言声掛けて行きましょう。」

たぶんまだメモリーメモリをいじってると思うので」

「そうだな、地下に入るか」

とまあ、そんなこんなで地下室に入った僕らが目にしたものは、ぶつ倒れているフィリップさんだった。

「フィリップうううううう！？」

「フィリップさああああん！？」

どうしてこうなった。

そして二人して介抱し、ようやく目を覚ましたフィリップさんは、

「……面白い！ゾクゾクしっぱなしだよ！！」

「開口一番それかよ！！」

こんな状態である。

しばらくして落ち着いたフィリップさんから僕らはメモリーメモリのことを教わった。

「聡里くん、君のメモリからアクセスできる本棚は、僕が入れる物

とは独立していた。

そして、中の記憶も大半が封印されている状態みたいなんだ」
「え、そうなんですか？」

変身したときに違和感があると思った。そういうことなのか。

「だが本のタイトルくらいはわかった。でも、そのタイトルも意味がわからない単語ばかりなんだ。

これから言う言葉、あるいは名前に心当たりがあったら言ってくれないかな？」

「はい、どんな単語なんですか？」

「ああ。クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド。

それから、響鬼、カブト、電王、キバ、ディケイド、オーズという単語なんだけどね」

「え、それって！」

むしろ心当たりしかないよ、これは。

「なんだ、一体何の記憶なんだ？」

「え〜っと、ですね……僕や翔太郎さんとフィリップさん以外の、ライダーの名前です。

それも、結構最近のライダーですね」

「へえ……興味深いね。だけど、僕もこのメモリのプロテクトは解除できなかったんだ。

だけど、まったく新しいメモリガジェット的设计図データが入っていた。

これから製作してみるよ。」

「本当ですか？なんでガジェットのデータが……？」

まあ、考えていても始まらないか。って、何か忘れてるような……あー！

「翔太郎さん、依頼のこと！」

「おつといけねえ、忘れてた！フィリップ、俺たちはこれから依頼された事件の捜査に行つて来る。

メモリーメモリはもういいか？」

「ああ、翔太郎。メモリーメモリに僕側からリンクを作ったから、これからは僕の本棚側からいつでもアクセスできるし、

メモリーメモリから僕の本棚が閲覧できるようになっているはずさ。メモリのほうは聡里くんに戻すよ」

「便利なもんだな。じゃ、行くぞ聡里！」

「了解です、翔太郎さん！」

そして、僕たち二人は風都で捜査を開始した。

途中なんか見覚えのある人が魚屋さんで小指を魚の口に突っ込んでいたり、木の上に自転車ごと引つかかっていた不幸な人を助けたりしつつ風車が壊れた場所を見ていくと翔太郎さんが共通点を発見した。

「デートスポット、ですか？」

「ああ、ウオッチャマンやクイーンとエリザベスに聞いて判ったんだが、風車が壊された場所の近くは有名なデートスポットがあつてな、風車が壊された関係で人を近づけないようにしたらしい」

「と、いうことはもしかして？」

「ああ、他人の恋愛を妬ましく思っている奴だな犯人は。だが、あと一箇所壊されていない有名なデートスポット、それも特大のがある」

「それってまさか、『風都タワー』、ですか？」

「その通りだ、さすが助手だな。犯人は大体、週末や祝日に事件を起こしている。ちょうど今日は金曜、風都タワーに張り込むぞ」

「わかりました。フィリップさんに連絡して、犯人がどこから行動を起こすのか検索してもらいましょう！」

と、言うわけで鳴海探偵事務所に戻ってくるとフィリップさんは嬉々として変わった形のノートパソコンと携帯を操作していた。

「フィリップ、検索だ……って、なんだそりゃ？」

「ああ、翔太郎に聡里くん。いいところに来たね。メモリガジェットが完成したよ」

「本当ですか！どこにあるんですか!？」

そう僕が聞くと、フィリップさんはおもむろに二本のギジメモリを取り出した。

そして、ノートパソコンと携帯にそのギジメモリを挿入した。

「紹介するよ。彼らが新しいメモリガジェット、『マンタレイライブラリ』と『ホークフォン』だ!」

「MANTAREY!」「HAWK!」

ガイアウイスパーが鳴り響くと、パソコンと携帯が変形してマンタと鷹になった。

「おお、コイツが新しいメモリガジェットか!」

「すごい!ありがとうございます!」

「さらに、マンタレイライブラリにはメモリーメモリからのデータ読み込みもできるようにしてある。

一応、キーワードがあれば検索もできるようになっているから、役に立つと思うよ。

「どうかな、彼らは?」

「さ」……「感動で言葉すら出てこなくなっている

翔」……「驚愕で固まっている

1分後

「あ、フィリップ、検索だ。頼めるか?」

「もちろんさ。……さあ、検索を始めよう。キーワードは?」

「キーワードは、『風都タワー』、『攻撃』、『隠れ場所』だ」

そのキーワードで、フィリップの検索結果がある程度絞られた。だが絞りきったほどではない。

「駄目だ翔太郎、絞り込みきれない。他にキーワードは?」

「あ、フィリップさん!キーワード追加、『風圧』!」

その一言で、フィリップの検索が一冊の本に絞り込まれた。

「ああ、検索完了だ！ナイスだよ聡里くん！」

翔太郎、結果は風都タワーの裏側の廃工場だ。そこで張り込みしていれば、ドーパントが現れるはずだよ」

「ありがとよ、フィリップ。んじゃ、ちよつくら行って来るぜ」

僕と翔太郎さんは、メモリとドライバーを持ってその工場へ向かった。

そして時間は過ぎて翌日の深夜二時ごろ。丸一日張り込んでいたけれど犯人はまだ現れていない。

「翔太郎さ〜ん、アンパンと牛乳買って来ましたよ〜」

「助かった、これまでは買い込んでから見張りするしかなかったんでな」

「いえ、お安い御用ですよ……！来た！翔太郎さん、これ！」

僕はそう言って翔太郎さんにPCモードのマンタレイライブラリの画面を見せる。

そこにはホークフォンの暗視カメラから転送された映像が映っていて、工場の入り口から入ってくる一人の冴えない男が写っていた。

「でかした聡里。気づかれないようにアイツに近づくぞ」

「アイ・アイ・サー」

闇にまぎれて動くのって小さいころからなんかワクワクするね。

（犯人サイド）

「くっそ、クリスマスなんかなくなっちまえ！デートなんかさせるかよ！」

暴言を吐く彼は冴えない容姿と陰気な性格のせいで、まったく女性に興味を持ってもらえなかった。

そして男は、クリスマスをブチ壊すというその考えに取り憑かれ、禁断の力、ガイアメモリを手に入れてしまった。

そしてその男はスタートアップスイッチを押し、メモリを起動させ

る。

「AIR!」

「デートスポットなんて、壊れちまえばいいんだ!!」

そう吐き捨て変身しようとした瞬間、工場内に声が鳴り響いた。

「おおっと。そんなことさせると思っつか?」

「思い通りにはさせませんよ!」

「!」

（聡里サイド）

ドーパントにセリフを投げつけながら登場する翔太郎さんと僕。

相手は露骨に悪意のこもった表情になり、ガイアメモリを握り締める。

「うるせえ、人が仕事するしかない日に横でイチャイチャされる方の身にもなれってんだ!邪魔すんな!」

そしてその男は、自分のひじにある生体コネクタにガイアメモリを挿入し、ドーパントへ変身してしまった。

「うわあ、ドーピングしちゃったよ」

「じゃあねえな。フィリップ、聡里!こっちも行くぞ!」「JOKER!」

「もちろんさ、相棒」「CYCLONE!」

「わかってますよ、翔太郎さん!」「MEMORY!」

「変身!」

「CYCLONE! JOKER!」

「さあ、お前の罪を数えろ!」

「変身!」

「MEMORY!」

「貴方の記憶、見せてもらいます!」

『翔太郎、あのドーパントは『エア・ドーパント』。空気を操る力を持っていて、

かまいたちを飛ばして攻撃するらしい』

「だったら、このメモリだ！」

そう言い、翔太郎さんは左側、ボディサイドのメモリを変更する。

「TRIGGER！」

「CYCLONE！ TRIGGER！」

「サイクロントリガー……だったら僕も！」

そう言いつつ、僕はメモリーメモリをベルトから抜き、ウェポンスロットに装填する。すると左胸の位置にメモリーの装甲と同じ色のトリガーマグナム、メモリーマグナムが現れる。

「行け、空気野郎！」

「空気って言うんじゃない！」

そんなことを言いつつ、ドーパントはかまいたちをWに向かって飛ばす。だが、Wはやすやすとかわして風の弾丸を敵に撃ち込む。

「てめえ、いいかげんにしやがれ！」

「僕も忘れてもらっちゃ困りますよ！」

ドーパントに言い返しつつ、僕もメモリーマグナムで敵を射撃する。

「ぐあああああ！？……なーんてな」

「『何！？』」

その瞬間、まるで砲撃のようにもすごい風圧がWとメモリーに襲い掛かる！

「『あああああッ！？』」

その攻撃で、Wとメモリーは工場の壁を突き破り外へ放り出される。

「今の攻撃、なんだってんだ！？」

『あの攻撃は風……もしかして』

「ええ、フィリップさん。おそらく空気を圧縮してから一方向へ一

気に開放したんでしょう。となると、直撃すればけっこうヤバいですよ」

そんな感じで、僕らはドーパントの攻撃を回避しながら話し合っていた。

「……翔太郎さん、フィリップさん。一つ思いついた打開策があるんですけど」

そう言っつて、僕は翔太郎さんとフィリップさんに作戦を伝える。

「どういうことだ？」

『ああ……なるほどね』

「っつてわけで、協力お願いしますよ！行きますよ、ボス！」

「ボスっつておい……まあいいか。作戦は良く判らねえがやるぞ、フィリップ！」

『もちろんだとも、翔太郎』

そして、Wは『ハードボイルダー』、僕は僕のバイク『メモリーボイルダー』に乗っつてある所へドーパントを誘導して行く。

「てめえらチヨコマカ逃げ回ってンじゃねエエエエエエ！」

ドーパントは風を背中側から噴出しバイクに匹敵する速度で追いつがってくる！

まあ、追っつて来てくれないと、作戦自体成立しなくなるんだけど……

そして半時間かけて、ドーパントを狙い通りの場所、港まで連れて来た。

「や、やっとたどり着いたぜ……」

『途中、竜巻で上空に打ち上げられたときはどうなるかと思ったよ』

……』

「」でも目的地には着きました！後は……！」

「おう！コイツで決めるぜ！」

「JOKER!」

「CYCLONE! JOKER!」

そしてサイクロンジョーカーに変身したWは、サイクロンサイドの能力で竜巻を巻き起こしドーパントの攻撃を吸収・無効化する。

「なんだと!?俺の砲撃を取り込んでやがるのか!」

「当たり前だ!お前なんかの風が相棒の疾風サイクロンに敵うか!」

『まあ、当然の結果だね』

そしてWは、その風を纏った右腕でエア・ドーパントを上空へ殴り上げる!

「がはっ!?だが俺はこんな攻撃では……」

「誰がそれだけって言いましたか!」

「MEMORY!」

「メモリーシャフト!いつきまあす!即興技、ライダーバッティング!」

「ぐああああ!?!」

僕は打ち上げられたドーパントをメモリーシャフトでバッティングするように打ち、海の中に叩き込んだ。

「くっそ、あいつら!砲撃してや……ツチ!、空気がねえ!」

そう、僕がWに伝えた作戦とは、『ドーパントを水中へ沈める』というものだった。

メモリーの力を使ってドーパントの能力を検索した結果、エア・ドーパントの能力が『接触している気体を操る』という物だったから、『気体に接触しない状況』を作り出せば良いと思い、この作戦を考えついて翔太郎さんとフィリップさんに教えたんだ。

「翔太郎さん、フィリップさん!仕上げ行きますよ!」

「ああ!」

そして二人揃ってメモリを取り出し、マキシマムスロットへ挿入す

る。

「JOKER！ MAXIMUMDRIVE！！」

「MEMORY！ MAXIMUMDRIVE！！」

「まずは……その場に縫いとめる！」

そう叫び、メモリーシャフトをドーパントへ投げつけ、突き刺してその場に足止めする。

「ガアアアツ！？ 動けねえ！！」

「メモリー！ 同時に決めるぞ！！」

「了解です、翔太郎さん！」

「『はあああああつ……！！』」

気合を込め、僕ら二人は上に飛び上がる。そして、メモリブレイク！

「『ジョーカーエクストリーム！！』」

「メモリークラッシュャー！！」

Wが左右に分離しキックを叩き込み、僕はドーパントに突き立てたメモリーシャフトを相手に突きこむように上から踏みつける！

「貴方の罪、記憶しました」

「ぐあああああああああつ！！」

断末魔の叫びと共にエア・ドーパントは爆発し、メモリが排出され砕け散った。

「事件記録」

「ドーパントに変身していた男はすぐに警察に引き渡しました。」

「お約束の刃野刑事さんの他に、どこかで見たような不器用な警察の人が来て犯人を連行していったけど、なんだったんでしょうね？」

「それはそれとして。女の人に気づいてもらえない程度の事でドーパントなんて、アブない人でした。」

「まあ、なんでも、いいですけど。翔太郎さんは、どうやら風祭さ

んにいいところを見せたかったみたいですね。」

「でも、婚約しているとわかってすごい落ち込んでました。さすがハーフボイルド。」

「そして、明らかになったガイアメモリ販売員の特徴。」

「赤いシミのあるスカートの男、だそうです。一体どうい人物なんでしょう。」

「それはともかく、これからも、僕は翔太郎さんたちに協力させてもらうことにしましょう。」

「……こんなものでいいかな。ありがと、マンタレイ」

僕は、マンタレイライブラリに事件の記録を入力するのを終えて、自分で淹れた紅茶（砂糖少な目のミルクティー）を静かに飲む……つもりだったんだけど。

「亜樹子おおおおお！」

「ぶっふう！」

思わず吹いちゃった。何事かと思って見に行くと、そこでは。

「俺のプリン返せ！」

「もう食べちゃったもん」

「じゃあ弁償しやがれえええ！」

と、喧嘩している探偵（二十四歳）と女性（二十歳）。誰かは言わずもがなでしょう。

「翔太郎さん、亜樹子さん……」

「え、聡里くん……？」

「ちょ、おい落ち着け！」

ハリセンを構える僕に対し、あっけにとられている亜樹子さんとオドオドしだす翔太郎さん。

「僕は本来、あんまり手は上げないんですけどね……？」

第二話：Mの邂逅／聖夜の攻防（後書き）

作者「はい、というわけで第二話でした！」

聡里「なんというか、ハチャメチャな動機ですね」

作者「本編でも似たようなノリがあった気がするけどな。

でも、おまえにはわからない悩みだらうなく、女に縁が無い
つてのは」

聡里「どういう意味ですか？」

作者「だってお前、元の世界ではよく従兄弟とじゃれあってたじゃないか。あれはどう説明するよ？」

聡里「あれは僕がおもちゃにされていただけですよ。そんな感情、
あっちにあるわけじゃないじゃないですか」

作者「はいはい朴念仁朴念仁」

聡里「もうっ！そんなことはいいいからいろいろ紹介いきます！」

「メモリガジェット」

マンタレイライブラリ

マンタ PCで変形するメモリガジェット。

ギジメモリは「マンタレイ（MANTAREY）」。

ホークフォン

鷹 携帯に変形するメモリガジェット。
ギジメモリは「ホーク（HAWK）」。

「マシン」

マシンメモリーボイルダー

ハードボイルダーがグリーンクリスタルカラーになったもの。

ハードボイルダーの換装ユニットと規格が共通で、

タービュラ・スプラッシャー・スタートダッシュユニットやガンナーAもそのまま使える。

聡里「こんなものですかね。だんだんデータまとめるのにも慣れてきた気がします」

作者「さて、ここで皆様にちょっとばかりお知らせを。これから、感想で『お土産』といった形で出して欲しいアイテムがあれば書いて下さると、そのアイテムをもしかしたらこちらで使うかも？」

聡里「アイテムはライダー以外でも、たとえば『ライトセイバー』とか『ホレ薬』とかでもなんでもかまいません」

作者「基本このあとがき劇場（仮）で使いますが、もしかしたら本編にも出すかも？」

聡里「作者の勉強にもなるので、是非お願いします」

作者「それじゃ、次回予告行くか！」

聡里「了解です！」

「次回の、記憶のライダーは」

フィリップ「復讐代理人？」

??? 「この街には悪意が満ち満ちている！」

翔太郎 「しまった、俺のメモリが！」

聡里 「翔太郎さんのメモリを返せ！」

??? 「俺も、人の心を救うもの……仮面ライダーだ！」

「次回：Vの暴走／ライダーの資格」

作者・聡里「これで決まりだ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9235y/>

記憶のライダー

2011年12月23日02時46分発行